
ファミリー日記

子鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファミリー日記

【Nコード】

N1357C

【作者名】

子鉄

【あらすじ】

温かい家族のある一日のお話です。 山倉寛治36才山倉信子34才山倉かの子9才山倉慎太郎6才山倉茶太郎1才

おでんの日

「お父ちゃんね、みんなの事が大事なんだよ」

夕食時、ほろ酔い気分の寛治は優しく家族に語りかけた。

「みんなが元気でいてくれるからお父ちゃんはがんばれるんだ。みんなが一緒にこうしている事が幸せなんだよ」

寛治は家族一人一人の目を見ながら続けた。
今日は語りたい気分なのであろう。

「例えばさ、このおでんを御覧よ。ほっぺがぷにぷにしたかの子は玉子、石頭の慎太郎はじゃがいも、母ちゃんはみんなを優しく包むお出しだね」

一つの鍋で所狭しと重なり合うおでんを、狭い家で暖かく暮らす家族に例えた。

「じゃあ、おひげがじよりじよりしたお父ちゃんはゴボウだね」

「あははは」

末っ子の慎太郎がそう言うとみんなが笑った。

「でもさ、おでんにゴボウは入ってないから、お父ちゃんだけきんぴらだね」

「ほんとだ、あははは」

長女のかの子が言つとまたみんなが笑つた。

「ちよつ、ちよつと待つてくれよ、きんぴらは出しに包まれてないじゃないかっ！」

寛治が慌てて言つた。

半べそ状態である。

「じゃあ大根にしてあげようか？」

「うつつ、ああっ、いいの？ありがとう」

温かく見守るように、空では満月が優しく光っていた。

自分は中身がいっぱい詰まつてるがんもだと言いたかったが、今日のところは太根で我慢する寛治であつた。

お豆さん

『お母ちゃんこれ何?』

慎太郎が台所で料理をしている信子に聞いた。

『それはね、いんげんよ。』

『じゃあこれは?』

好奇心旺盛な慎太郎はいろんな物が気になる年ごろらしい。

『それはプチトマト。』

『プチトマト?じゃあこれは?』

『それはお豆さん。』

『お豆さん?なんでお豆だけさん付けなの?』

『

え?うーん、それはね、みんなに慕われてるからなの。』

ちょっと苦しいかなと思いつながら信子はなんとか理由を探した。

『なんでみんなに慕われてるの?』

『うーん、栄養が満点だからかな。』

『慎太郎、そこのお饅頭二つに割ってごらん？』
パカッ

『ちっちゃい小豆がいっぱいはいってるでしょ？

それはお豆ちゃん。こっちの大きいのがお豆さんで、ちっちゃいのがお豆ちゃん。』

信子は笑いながら饅頭の半分を口に入れ、もう半分を慎太郎に渡した。

『慎太郎は今は慎太郎ちゃんだけど、もっと大きくなったら慎太郎さんになるんだよ。

早く大きくなって立派な慎太郎さんになってね。』

『うん、僕立派な慎太郎さん昆虫博士になる。』

『うふふ、頼もしいわね。』

あははは。

慎太郎は笑いながら饅頭の端をかじった。

『でもお母ちゃんは大きいのお母ちゃんだね？』

『え？あつ、ああ、お母ちゃんはね、お母ちゃんでもあるしお母さんでもあるの。』

慎太郎が大きくなって一人前になって素敵なお嫁さんをもらったら、その人からお母さんと呼んでもらうの。」

『ふーん。じゃあお父ちゃんは？』

『あの人は野球野球って野球ばかりだから、その野球病が治ったらお父さんになれるかもね？』

信子は冷蔵庫から麦茶を出すと、コップに注ぎ、慎太郎に渡した。

『ふーん。じゃあお父ちゃんはずっとお父ちゃんのままだね。』

『そうね、うふふ。』

あははは。

『ただいまっ。』

何も知らない寛治がバットとグローブを持って帰ってきた。

『おかえりっ！お・と・う・ちゃ・ん。』

心の一句

『慎太郎っ！』

『なあに？』

『最近な、かの子とお母ちゃんがなんかよそそしいんだ。何か知らないか？』

『えっ！ぼつ、僕何も知らない。』

『そつ、そうか。気のせいだといいいんだけど。なんかお父ちゃん寂しいよ。』

『きつ、きつ、気のせいだよ。うん。』

『そうか。あまり気にしないほうがいいかな？ふうつ。』

寛治は寂しそうにため息をついた。
気にしないほうがいいとは思いつつ、最近自分が避けられているのが気のせいではないと分かっていた。

次の日、家へ帰ると中は真っ暗だった。

『ただいま。誰もいないのか？はあつ。』

ため息をつきながら電気を点けた。

・・・？

『おめでとっつ！』

『えっ？』

突然の事に寛治は哑然とした。

『えっ？お父ちゃん誕生日じゃないし、結婚記念日でもないよ？』

呆氣にとられながら寛治が言つと、かの子が答えた。

『えー、実はお父ちゃんがこないだ毎朝新聞に送った俳句が佳作をとりました。』

『みんな拍手っ！』

パチパチパチパチっ

『えっ？本当？』

『お父ちゃんには悪いけど今日の祝賀会まで内緒にさせてもらいました。最近冷たくしてごめんね。』

『そっ、そうだったのか。うつつ、みんなありがとっ。』

『泣かないでお父ちゃんっ！』

『うつつ、それで慎太郎も最近冷たかったんだね?』

『え? 僕は知らなかったよ?』

『あつ、ああそうなんだ。』

少しだけ反抗期を迎え成長した我が子にうれしいやらかなしいやら、複雑な父寛治だった。

佳作

東京都2児のパパさん

かぞくみな

元気でいれば

いとうれし

選評

温かい作品ですね。

とても素敵な家族とお幸せにお過ごしください。

私は先月嫁と子供に逃げられ、残ってくれたのはポチだけです。

ありがとう、ポチ。

ほんまにありがとうやで。

逆転ホームラン

町内にはいろんな人が住んでいる。

地区会長の中畑さん、いつも公園で立ち話をしている原さんと堀内さん、犬の散歩を欠かさない駒田さんなどいろんな人がいる。

中でも変り者なのが向かいの黒間だ。

大の野球好きで巨人一筋40年という筋金入りの巨人ファンだ。息子の貞君はかの子と同じ小学六年生でリトルリーグに入っている。こないだも敬遠された球を打ちサヨナラ勝ちしたらしい。

子供が同級生なのと、親同士年が近いのもあっていつも親しくさせてもらっていた。

「どーもっ。野球始まった？」

「あら黒間さん今日もうちで見てくの？」

「みんなで見た方が楽しいからさ。ほいつ、ビール持ってきたよ。寛ちゃんいる？」

「居間にいるわよ」

「おっじゃましまぁーす」

黒間はいつもこの調子であった。

「おうつ、寛ちゃん」

「ああ、待ってたよ」

「どうだい？試合は」

「今二回表・0だね」

酒を飲みながらピッチャーがどうした監督がどうだと議論するのが二人のお父さんの楽しみだった。

「いやあ参ったよ」

黒間は頭をかきながら言った。

「こないだうちの息子がホームラン打ちやがってさあ、監督もプ口入りがどうしたとか言いだしやがってまだ早いっつうんだよな。がははは。」

黒間は得意満面に自慢した。

「お宅のかの子ちゃんは女の子だからあれだけど、慎ちゃんはやっぱり野球やらすの？」

「いやあ、下のは運動神経ないからね。それに慎太郎は昆虫博士に成りたいっていつてるんだ」

「え？昆虫？あの？ぶつ、あーはっはっは。昆虫？ぶぶぶつ。いやあ、昆虫ですか？あの？飛んでる汚いやつ？参った参った。虫ですか」

黒間は腹を抱えて笑った。

『いやあ、しかし虫少年て言うのも・・・』

『おい。』

『え?』

『おいそのボロ雑巾みたいな顔したお前っ!』

『ぞっ、雑巾てっ!』

『うるせーこのシヨンベンハゲがつ!野球ができたら偉いのか?あ?うちの子はそりゃあ優しい子なんだよ。お前みたいに野球しか頭がないぼんくらとは分けが違うんだ。分かるかっ!』

既にビールを二本飲み干していた寛治は止まることを知らなかった。

『あ、ああ。』

『返事はいだろっ!』

『はっ、はい。』

『アホみてーな顔して、はっ、はいじゃねーんだわ。指を全部ピンと伸ばして両膝に付けて・・・はいっ!!だろ?』

『はいっ!!..!』

『もういいから家戻って極上の日本酒があつただろ？あれ取ってこい。』

『いや、あれは・・・』

『とつてこい。』

寛治の目がキラリと光った。

『返事は？』

『はいっ！！』

『よし、いい返事だ。走れっ！』

『はいっ！！』

『黒は返事だけはプロ級だわ。あーはっはっは。』

寛治は酔うと性格が一変してしまう所があつた。

『寛ちゃんそれ位にしてあげないと。』

見兼ねた信子が台所から割って入った。

『あ？お前もお前だよな？毎晩コロッケばっか食わしやがって。見るこのちっちゃい肉を。たまには分厚いステーキが食いてーやな。でっかいのは尻だけか？大体お前・・・』

『・・・おい』

『え？』

『おいっ！！お前今なんつった？今なんつったんだっ！尻がでかい？そう言ったか？』

『い、いえ。』

『そう言っただな？』

『いえ、覚えてません。』

寛治の顔色が変わった。

『言っただわ。19時42分に確かに言っただわ。言っていいことと悪いことがあるな？えっ？』

尻のことは言うなと言っただな？あつ？

この尻が何か悪いことしたか？あんっ？』

『いえ、ぎりぎり大丈夫です。』

『そうだな！ぎりぎりだな！大体肉が食いたかったらもつと稼いでこいっ！返事はっ！』

『はいっ！！』

寛治は指を全部ピンと伸ばして両膝に付けて返事をした。

『あとお前。』

黒間はドキッとした。

『わっ私ですか?』

『おい黒っ、お前しかいないだろ?』

『はいっ!-!』

『もう反省してるみたいだから許してやるけど、うちの子を悪く言うとか許さないよ。うちの子も黒の子も大事な宝物なんだ。』

『はい。反省してます。』

『よし。じゃあ20時からドラマ

「愛に汚れて」が始まるからチャンネル変えて。』

『え?でも、今満塁のチャンスなん・・・。』

『か・え・ろ。』

『はいっ!-!』

結局信子の前では二人とも成すすが無かった。

『黒ちゃん家で野球の続き見てきていいですか?』

『終わったらすぐ帰ってくるんだよ?』

『分かりました。行こう。』

『うん。』

二人は泣きながら去って行った。

その日巨人は二人の気持ちを象徴するように完封負けした。

茶太郎

うちにはまだ可愛い家族がいた。

茶太郎だ。

茶太郎はかの子が公園から拾ってきた雄ネコで茶色い体にまだらな白い模様が特徴であった。

『お母ちゃん、茶太郎にハムあげていい？』

かの子は冷蔵庫を開けながら言った。

『いいけどお父ちゃんのおつまみが無くなっちゃうからあげすぎないでね？』

『うん。おいで茶太郎っ』

かの子は手のひらに乗せたハムを茶太郎に向けて差し出した。

ふがふが言いながら平らげると茶太郎は求めるような目でかの子を見た。

『お母ちゃんもつとあげていい？』

『いいけど・・・残しといてよ』

よかったねと茶太郎に言いつかの子はハムを切り、一心に見つめる子猫の前に座った。

『どうぞ』

『ふがふが』

『おいしい？』

『ふがふが』

『ハム好きなんだね』

『ふがふが．．．．．』

．．．その日の夜。

『ただいまつ。いやあ暑いな。こんな時はナイターを見ながらビールだーね。信子さん？』

『だーね。』

寛治は信子に軽く微笑むと冷蔵庫を開けた。

『えつと、お隣さんに頂いたハムがあつたよな。えーと．．．あれ？無い？信子さんハムないね。』

『だーね。かの子が．．．』

『えっ！』

寛治は突然の事に呆然とした。

娘には嫌われたくない、しかし言うべきことは言わなければ。

『かの子っ！こっち来なさい』

『はい？』

『なんでハム全部食べちゃったんだ？』

『だって、茶太郎がおいしそうに食べてたから』

『茶太郎が？』

『うん。茶太郎が』

『茶太郎が．．．．．』

寛治はソファで気持ち良さそうに寝る茶太郎に目をやった。

その時、寛治は無防備に眠る子猫を見て気付いた。

可愛い．．．。

怒れない。

『うん』

寛治は意を決したように頷いた。

『うんうん。いいよ、いい。かの子と茶太郎が喜んでくれたらお父ちゃんそれでいいつ。うん』

寛治は自分に言い聞かせるように言った。

『寛ちゃん、今日はピーナッツで我慢してね』

『んだーね、だーね』

寛治はうつすらと浮かんだ涙を吹きながら居間へ行った。

パチんとテレビを付けると巨人戦にチャンネルを合わせた。

『馬鹿野郎っ！そこは高めに変化球だろっ！』

『あー、なにやってんだっ！』

寛治の怒りは巨人に向けられたようだ。

『そこっ！だめだだめだっ！まったくもう。あーあ、ハム食べ・・・』

・・・

『えっ！！なんか言ったのっ！？』

台所から信子とかの子の声が響いた。

『な、なんでもありません』

寛治はゴロゴロする茶太郎のお腹をつつきながら言った。

かりんとう

『馬鹿野郎っ！』

日曜日の午後寛治の怒声が響いた。

『お母ちゃんに謝れっ！』

おやつが姉より少なかった慎太郎が、怒って母信子のお腹を叩いたのだ。

『うつっ、いやだっ。いつもお姉ちゃんばっかいつぱいもらってるじゃないか』

『それでも人を叩いていい理由にならないだろ。どんな時だって人を傷つけちゃいけないんだ。まして女性には優しくしなければいけないんだよ。いい子いい子してあげないと駄目なんだ』

『うつっ』

『なっ、謝っちゃえ。ごめんなさいって。お父ちゃんも謝るよ。馬鹿じゃない慎太郎に馬鹿って言っちゃったから。ごめんな』

そう言いながら寛治は慎太郎の頭を撫でた。

『う、ごめんださい』

『よしっ！偉いぞっ。信子さんも許してあげるよね？』

『うん。ごめんね、慎太郎はもうこんなにお兄ちゃんになったんだから、おやつもお姉ちゃんと同じだけあげないとね。・・・でも、かりんとう全部無くなっちゃったの』

『うつつ、食べたい』

慎太郎は心中まだ治まっていないうだった。

『泣くのおよし？やさしいお父ちゃんが分けてくれるからね？』

かの子がそう言うときみな視線が寛治とお皿いっぱいのかりんとうに向けられた。

『えっ！お父ちゃん？なんで？お父ちゃん昨日の胡麻センベイも食べてないよ？』

泣きそうになる寛治に信子が追い打ちをかけた。

『あなた一番お兄ちゃんですよ！』

『うつつ、末っ子がよかった』

寛治は泣きながらかりんとうを慎太郎の皿に移した。

『偉いぞお兄ちゃん』

かの子が言つとみんな笑つた。

それを聞いていた隣の長島さんは泣いていた。

『おい婆さんつ。こないだもらったお菓子詰め合せ隣に持ってい
つておやりつ』

泣いていた寛治が笑うのはこの五分後の事だった。

スーパーヒーロー散る

今日は慎太郎の誕生日。

我が子が六回無事に年を重ねてくれたことを感謝する日だ。

もちろんこの日の為に慎太郎が欲しいものをそれとなく聞き、準備は万端であった。

ヒーロー戦隊フラッシュマンの人形がすでに押し入れてスタンバイしていた。

『誕生日おめでとう慎太郎』

『ありがとう』

はにかみながら慎太郎が応えた。
少し照れ屋ながら立派に成長していく我が子はどんたくましくなっていく。

『慎太郎がお利口さんにしてたからお父ちゃんとお母ちゃんから素敵なプレゼントがあるんだ。前から欲しがってたやつがあつたよね？』

『うん、スーパーザウルス。』

『えっ？ああ、えーと、あれ？』

寛治、信子、かの子の三人は予想外の展開に固唾を飲んだ。

野球に例えるなら九回裏ノーアウト満塁のピンチである。
好投を続けた先発寛治最大の危機だ。

『えー、もっと欲しいのあるんじゃないの?』

信子がすかさずこのピンチを打開しようとした。
リリースエースの登場だ。

『もっと欲しいもの?っ! いいの?』

慎太郎はようやく大事な物を思い出したようだ。

リリース信子は見事ダブルプレーに打ち取り、三人の心の中であと一人コールが響いた。
『言ってごらん?』

四番打者かの子が聞いた。

『えーと』

『えーと?』

『ヒーロー戦隊の』

『ヒーロー戦隊の?』

敵の打者が打った球は弱々しく上がりキャッチャー寛治の頭上に落ちてきた。

勝った!!

三人の頭に勝利の二文字が浮かんだ。
ゲームセットかつ!

『ヒーロー戦隊の怪獣ゴンゴン』

『っ！！！！』

落としたっ！！

チーム山倉まさかのサヨナラ負けっ！

最終回の守備、チームキャプテン寛治のエラーにより、試合は幕を閉じた。

結局7番目に名前が出てきたフラッシュマンだった。

押し入れを開けると隅の方で申し訳なさそうに小さくなっていた。

がんばれスーパーヒーロー。子供の熱は案外早く冷めるぞ。

遠足の日（前書き）

待ちに待った遠足の日、朝、戦場と化した我が家の台所と元気の無いおとうちゃんのお話。

遠足の日

明日はかの子が六年生の遠足に行く日だ。

うれしそうにお菓子をリュックに詰めたり、着ていく服を丁寧にたたんだりしている。

「ふふふ、やってるやってる。かの子っ、明日晴れるといいな」

寛治は準備をする我が子の背中に語りかけた。

「・・・・・・・・」

「かの子ちゃん？」

寛治は確認するように問い掛けた。

「なーに、今忙しいのっ」

「あっ、ああ、ごめん」

余程忙しかったのか、かの子の思いもよらぬ冷たい態度に少し淋しい気持ちになった。

「旅のしおりは入れたし、水筒は明日冷蔵庫から出して、後は・・・・・・・・うん、大丈夫。」

後は明日晴れるといいな」

ベランダでは、家族と同じ4つの照る照る坊主と一匹のネコ坊主が、初夏の涼しい風に吹かれ踊っていた。

——次の日の朝は緑山小学校の六年生みんなが望んだとおりの快晴であつた。

寛治が眠い目を擦りながら下へ降りていくと、かの子と信子がお弁当を作っている。

「かの子っ、卵とつて」

「はいよ、お母ちゃん」

「お母ちゃんこれ火止めるよ？」

「うん、お願い」

戦場のような台所の様子に寛治は少々たじろいだ。

「おっおはよう」

「えっ！なに？そこにパンがあるし食べてっ」

「・・・・・・はい」

忙しいのは分かるが寛治は少々淋しい気持ちになる。

朝のニュースを見ながらパンを食べると身仕度をし、そそくさと仕事へ向かった。

「はあっ、娘なんて大きくなるとあんなもんかね」

快晴にもかかわらず寛治の足取りは重かった。

「お母ちゃん行ってきたあす……あれ？」

かの子が急ぎ足で出掛ける時、いつもと違う異変に気付く。
玄関に置いてあった白い箱、蓋にはマジックでかの子と書かれてあった。

「ん？」

箱を開けると真新しい赤色のスニーカー、上に一枚の紙が置いてあった。

***気を付けて行っておいで。お父ちゃん・お母ちゃん・慎太郎・茶太郎より。

「みつ、みんなっ、ありがとう。無事帰ってきますっ」

ピカピカのスニーカーの紐をキュッと縛ると元気よく走って出掛けた。

——お昼時、寛治はあまり食欲がなかった。

「かの子も年ごろだから仕方がないのかなあ、はあっ。」

溜息をつきながら弁当箱をパカッと開けると、海苔で作った顔に LOVE という文字。

挟まっていた紙には「これ食べて午後からがんばってね（＾。＾）」

かの子・信子」と書いてあった。

「うおおーっ！」

寛治はお弁当を一気に食べると三十分も早く仕事に戻った。

毎日これなら出世も早そうである。

それをデスクから見ていた松井部長は目を細める。

「私は毎日自分で作ったお弁当だよ」

ぼそっとつぶやき、自ら作った出し巻きの味に再び目を細めた。

遠足の日（後書き）

また遠足行きたいですね
・

最強の末っ子来たる

「茶太郎こっちおいでっ」

「フニヤっ」

かの子が名前を呼ぶと茶太郎は返事をするように応え、とぼとぼ歩いてきた。

その愛くるしい茶虎柄の猫は、かの子が一年前に拾ってきた我が家のアイドルだ。

最初、寛治も信子も野良猫を飼うことには大反対だった。

生きものを飼うことはとても大変なことだし、とても責任のいることだからだ。

2人とも動物は好きであったが、けじめと言うものはつけなければいけない。

毅然とした態度で、物事を伝える。

それが子供に対する教育だ。

「どうしたの？その子猫」

「公園で寂しそうにしてたの、ねえ飼ってもいいでしょ？」

「だめよ。うちではネコなんか飼う余裕はないの」

「なんでっ！」

「だめっ！大体そんな汚いネコ……はっ！」

信子は見ってしまった。

純粹で丸すぎる黒目を……………

——その日の夕方。

「ただいまっ。信子さんお風呂湧いてる?」

寛治が微酔い気分で帰宅した。

「ウニヤー」

家を元気に走り回る子猫と寛治が玄関で対面した。

「うーん、可愛ええな。……………えっ!?なにこの猫。」

「かわゆいでしょ?」

続いてかの子が出てきた。

「お父ちゃん飼ってもいいでしょ?」

かの子は懇願する目で聞いた。

「飼いたい」

続いて慎太郎が出てきた。

「いいじゃろ?」

続いて裏のおじいちゃんが………なんで？

「だっ、ダメだよ。うちにはそんな汚いネコなんか飼う余裕はないよ。」

「いいでしょ？」

先程まで反対していた信子が続いた。

「のっ、信子さんまでなんだよ。あれ？」

信子を見ると麻薬にやられたような菱形の目をしていた。

「あなたもあの子の黒いお目目を御覧なさい」

「御覧なさいって、大体いくら子猫が………はふっ！」

寛治は見てしまった。

見てはいけないもの。

子猫の純粹すぎる澄んだ目を。

こうして可愛い子猫は茶太郎と名付けられ、我が家の大事な末っ子になった。

近所付き合いのとても上手な子で、裏の野村さん家にも茶太郎専用のお茶碗があることは山倉家の誰も知らない。

茶太郎今夜は帰っておいでね。

最強の末っ子来たる（後書き）

子猫には逆らえません。

隣のじいちゃん

寛治はこの家にもう36年住んでいる。

両親が亡くなって、今は三人と一匹の新しい家族と暮らしている。

ちなみに、慎太郎の飼っている虫は家族にいけない。

お隣の長島さんは寛治が生まれた時、いや、そのずっと前からの付き合いで、今だに子供の頃叱られた話をされる。

「おーい、慎ちゃん、寛ちゃんいるかいっ？」

庭でだんご虫をいじっていた慎太郎に長島さんが聞いた。

「お父ちゃん黒ちゃんと野球見に行った」

「なんだよ、久しぶりに将棋指そうと思ってたのにな。じゃあ、慎ちゃんこっちでカステラ食べるかいっ？」

「食べたい」

「そうかそうか、じゃ、こっちにおいで」

慎太郎はだんご虫を大事に箱に入れると手を洗った。

「慎ちゃんはこの春で何才になった？」

「6才」

「そうか、慎ちゃんは虫博士になるんだったな。勉強してるんだな」

長島はお茶を飲みながら優しい眼差しで慎太郎を見た。

「慎ちゃんのお父さんなんかそらあわんぱくで手が付けられなかったよ。あの悪ガキからこんなに賢い坊っちゃんが生まれるとわね、いや、信子ちゃんに似たんだなきつと」

長島はそう言いながら、我が孫を眺めるように顔をしわくちやにする。

長島は御年82才で子供はいな

かった。

その為か、すぐ隣に住む悪ガキをとても可愛いがった。

その可愛い悪ガキの子供が慎太郎とかの子だ。

可愛く思わない筈が無い。

「慎ちゃんおもしろいか？昔はよく寛ちゃんが悪さしてねえ、たつぷり叱った後にこうやってカステラやらだんごやら食わしてやったんだ。なあ、お香代さん？」

居間で縫い物をする女房に視線を投げた。

「だめですよ、慎太郎ちゃんにそんな事言っちゃ。寛ちゃんはもう子供じゃないんですから」

「そらそうだ。あーっはっはっは」

「ごちそうさまでした」

慎太郎はカステラを食べると長島にお礼を言った。

「おいつ、待ちな。これ、みんなにも持っていてやってやりな。喧嘩と博打は江戸の花、カステラ、チャンポン長崎の花つってな」

長島さんはそう言うと、箱に入ったカステラを手渡した。

「ありがとう」

慎太郎は両手で大事そうにカステラを持ち、隣の我が家に戻った。

「おうつ、虫のやつがんばってな」

長島さんはそう言うと再びくしゃくしゃの笑顔で手を振った。

その日の昼過ぎ、長島さん家の呼び鈴が鳴った。

「はいはいっ。あれ？慎ちゃんどうしたんだい？」

「これ……………」

慎太郎は大事に持った箱を手渡した。

「うん？さっきあげたカステラの箱じゃないか。どうした？」

「開けて」

「うん？どれどれ。開けてびっくり珍道中ってか」

箱を開けるとだんご虫やらバッタが入っていた。

なにやら紙と一緒に入っているので開くと、おじいちゃんおばあちゃんいつもありがとうと書かれてある。

「あっああ、ありがとう」

その日の晩長島さんは泣きながら酒を飲んだ。

庭に逃がしてあげたバッタやだんご虫が慎太郎に捕まるのは次の日の朝のことである。

ちゃんと逃げなさい。

隣のじいちゃん（後書き）

虫ってなんであんなに恐いんでしょう。子供の時はいっぱい捕まえたのに。

お風呂行こうね

「らららー、ってかあ」

夕日がすっかり顔を隠した頃、微酔いの大黒柱が帰宅した。

「おーい、パパは風呂、飯、寝るの順でいこうと思うよ。お、思ふよ」

ご機嫌な父親を尻目に、残りのみんなはドラマに夢中の様子。玄関に走ってくる者は誰もいない。

「かの子ちゃん、一緒にお風呂入ろうね、えへへ」

居間の戸を開けると寛二は赤ら顔で微笑んだ。

「はっ？なんで私が？」

「ええじゃないか、ええじゃないかつ、えへへ」

「嫌っ！絶対嫌っ！」

「二百円あげるよ」

「嫌あああっ！」

二年生位までは一緒にお風呂に入っていたのに。成長した娘の姿に感慨無量の父寛二。

「うんうん」と微笑みながら二百円を財布にしまった。

「じゃ、信ちゃん。行こうか？」

視線を変えると再び二百円を手に乗せ、女房に向けた。

「嫌っ！嫌あああっ！」

「なんで？なんでそうなの？うっっ」

ショックでカバンを落とし、涙がこぼれないよう、天を仰いだ。

「しっ、慎太郎？」

「僕、入る」

「あっ、ありがとう。慎太郎は百円ね？」

まだまだ素直な長男の頭を撫でると、その小さな手に百円玉を一つ握らせた。

「ありがとう。明日も入る」

風鈴の音が夏の夜を涼しげに演出している。

「象さん！あはははっ」

お風呂場から聞こえる二人の笑い声がいつまでも鳴り響いていた。何でもないけど楽しいひととき、いつかは大きくなってしまふ我が子。

今しかない時間は「あっ！」と言う間に過ぎていく。

（もうちょっと小さいままでもいいね。）

頼りない慎太郎の背中をタオルで擦りながら、うれしい気持ちの寛二だった。

かの子

「おめでとうございます。 元気な女の子ですよ」

暑い暑い夏の日その子は生まれた。

「がんばった。 よくやったなあ」

寛治は涙を流しながら喜んだ。

「かの子だ！」

「え？」

「寛治と信子の子だからかの子」

「女の子ならそうしようと思ってたんだ」

「ちなみに男の子だったら慎太郎だったんだけどね。 大好きだったおじいちゃんの名前なんだ。 かの子っ。 立派に元気に育つんだよ。 お父ちゃんがんばるからね」

名前っていうのはとても大事な物だ。
一生身につける物だ。

かの子がかの子であり続けるかぎり、 寛治と信子の大事な大事な子なんだ。

誰にでも名前がある。 そして、そこにはつけてくれた人の思いが

ある。

その想いと同じくらいに大きい名前は本当に大事なものだ。

同じ日、三階の病室で田中かの子さんという92才のおばあちゃんが、食事の味にケチをつけ、看護師に食器を投げた。近所でも評判のがめつい、意地汚い婆さんらしい。

生まれた娘の名前を聞いた看護師は泣きながら早退したという。名前って本当に大事だ。

きつと、きつと、この娘が健康ないい子に育ちますように。病室の窓からのぞく大きな太陽に、2人は心の中で手を合わせ祈った。

「うんうん、いい子に育つよ」

そう言うかのように真っ赤な光を放つ太陽は、新しい宝物を見守るように優しく私達を照らしてくれていた。

亭主の不倫？

「奥さん、私と一緒に逃げてください。一からやり直しましょう」

「でっ、でも私には主人と子供が……」

「関係ないですよあんなやつ、自分だって今頃会社の若い娘とよろしくやってるんだ」

「えっ？そっ、そんなっ。私は騙されてたの？」

——女と男はどうなるのか、何も知らない旦那と子供たちは……

次回最終回「そして夜空へ」

「はー、おもしろかった。あんな旦那なんか捨てるべきよね。だっ
ておかしいわよ、若い娘とちゃらちゃらやって、奥さんが可愛そう
だわ。そうよっ、いつだって男って勝手よ！」

ピ・ポ・パ・ポ・ピ……プルップルップルップルッ

「はい、ありがとうございます、高山物産です」

「（この娘？）あっ、いつもお世話になっております、山倉の家内
ですが、主人はおりますでしょうか？」

「はい、少々お待ちくださいませ」

「・・・・・・・・もしもし？信子さん？」

寛治は何かあったのかドキドキしながら電話をとった。

「もしもし？あなたが会社の若い娘とちやらちやらやるっていうならこっちも考えがありますからねっ！」

信子は感情的に言い切った。

「ちよっ、ちよっとなんのこと？信子さん何かあったの？」

突然の事に何が何だか分からない寛治は動揺しながら聞いた。

もしかして、何かとんでもない事がばれたのか・・・・・・・・

「なっ、なんのことって・・・・・・・・え？ドラマ？」

「もしもし！もしもしっ？信子さん？」

「はいっ、はい」

「どうしたのさっ？」

「いえ、あのう、ドラマを見てまして、で、ちよっと興奮してしまっただけです」

信子は赤くなっただけに手を当てながら天を仰ぐ。

「あっ、あはははっ、またあのドラマ？夜空の恋人だっけ？そんな

に面白いんだ」

何事かと驚いた寛治は安心して笑みがこぼれた。

「はい、あの、今日は早く帰ってくるんですか？」

信子は顔を赤くしながら聞いた。

「えっ？ああ、今日は同僚の吉村君と一杯やって帰ろうかなと思つてね」

「はっ？なに？」

「いや、同僚のよ……」

「えっ？なんですか？ちょっとおかしな事しか聞こえてきませんが」

「あつ、ああ、ど・う・りょ・う・のつ、吉村……」

「はあっ？ちょっと分かりません。電波が乱れておるようですが、心の電波が」

「いや、でもたまには」

「約束破ったらどうなるんでしっけ？実家行きのタクシー手配しましょうか？えっ！」

「はっ、はい、一気に飲んで特急に乗ります」

「だーよね？」

門限が19時の寛治には浮気をするチャンスなどあるはずもなかった。

「それでいいんだよ、山倉君」

恐妻家の大先輩、松井部長は茶をすすりながら細い目を更に細める。そんな部長の門限は18:30（夕食のお使いの時間含む）。定年まで後5年、男は黙ってやるしかない。

やるしかないんだよ。

しいたけ

「あー、なんか楽しいことないかなあ」

日曜日の昼下がりに、縁側に腰掛けて足をばたばたさせながらの子がつぶやく。

「楽しいことかあ」

それを聞いた寛治は、隣で青く晴れ渡った空を見上げながら、答えるようにつぶやく。

「父ちゃんがかの子くらいの時は何でも楽しかったさ」

寛治が続け様につぶやきながら、横目で娘を見た。

「何でもは嘘でしょ」

かの子は疑わしげな表情で、空を見ていた視線を父に移した。

「いや、父ちゃんの頃は今みたいになんも無かったからな、何でも楽しかったさ」

古き良き時代を思い出すように遠くを見つめた。

「何でも？」

「ああ、何でもさ」

疑い深い娘に対し、良き時代を誇るように答えた。

「勉強も？」

「ん、ああ、もちろん」

「歯医者も？」

「・・・んーん、そうさ」

「しいたけも？」

「ん、ごぼつごぼつ、ああ」

咳払いをすると、視線を北北東に移しながら静かに頷いた。

秘かにしいただけだけは、初めて見た日以来、一切口にすることが無い。

子供の手前、それは今まで内緒にしてきたが、小学生の女の子は何げに鋭い。

「ねえ、しいたけさんも？」

「んごぼつ、ぼぼつ、うん」

だいぶ小さく咳にまぎれた返事をする、今度は視線を南南西に移した。

仕舞にその視線は上、右、下、左に行きつつ上、上、上と通常では有りえない動きを did した。

「ねー、しいたけの何が楽しいの？」

国会における野党の議員のように、娘の追求は止まらない。

「んー、楽しかないな、うん」

「楽しくないの？」

「うん、裏側がなめくじみたいだし」

「なめくじ・・・嫌いな？」

「んー、まあ、嫌い」

「しいたけは？」

「んー、まあ、うん」

床を無意味に人差し指でぐりぐり擦った。

「しいたけは？」

「・・・嫌い」

そう一言吐き捨てると、とても清々しい気持ちになった。

「あれはダメだよ、裏側が気持ち悪いよ、うん。表側もいささかア
ウト」

「へー、好き嫌いあるんだ？」

「うん、まあ、あれはダメ」

今まで隠してきたが、一度言っしまえばなんて事はなかった。

「じゃあ、あたしもしいたけ食べないでいい？」

「いいよいいよ、なんだよかのちゃん」

本当にいいのかという疑問は浮かんだが、とりあえず娘の肩を軽く叩いた。

「じゃ、成立ね」

「そのようですね」

「あはははっ」

穏やかな陽気の午後、二人の笑いが庭に響いた。

それを一部始終聞いていた台所の信子は、まな板の上の大量のしいたけを切り出すと悪そうにニヤリと笑った。

山倉家のハンバーグには、いつもしいたけがひそんでいることを二人は知らない。

ハンバーグを残さず食べる二人を見るのが、信子の秘かな楽しいことだ。

すずめの家族

新緑がキラキラ輝く5月の休日の夕方、寛治、かの子、慎太郎の三人と茶太郎は庭にいた。

庭に作った花壇の花に水をあげたり、雑草を摘んだりする為だ。

「あ、すずめ」

慎太郎が泥だらけの手で、庭の奥に降り立った一羽のすずめを指差した。

「かわいいな」

寛治が汚れた手を払いながら、庭の奥に視線を注いだ。

「パンあげよつと」

かの子はそう言うなり、台所から4分の1程度に切ったパンを持ち出してきた。

小さく小さくちぎると、すずめの手前にそつと投げた。

パンに気付いたすずめは、ちゅんちゅん言いながら小さな固まりをついばんだ。

「食べた」

慎太郎はうれしそうに微笑みながら、父親に伝えたと姉の手の中のパンをちぎってそっと投げた。

すずめは再びそれをついばむと、次をせがむように3人を見つめた。姉と弟が順番にパンを与えると、しばらくしてすずめはどこかに飛んでいった。

「お腹いっぱいになったのかなあ」

「うん、満腹でお家に帰ったね」

弟の問いに姉がやさしく答えた。

それからまたしばらく花壇の手入れをしていると、庭に数羽のすずめが降り立った。

「あ、さっきの子」

「そうなの？」

「右の足の爪が赤い」

慎太郎がそう言うと、縁側で麦茶を飲んでいた寛治は、我が子の観察力に目を細めた。

「家族を連れてきたんじゃない？パンくれる人がいるよって」

「お、お利口さん」

慎太郎がその場ですずめを撫でる振りをするように、手を上下させた。

「すずめの家族も大変なんだなあ、うんうん、わかるよ」

寛治が感心するように言うと、再び姉と弟が順番にパンをちぎってそつと投げた。

4分の1程度に切ったパンが無くなる頃、すずめの家族は満足したのか一斉に空へと飛び立っていった。

「ほのぼのしたな」

寛治が笑いながら言うと、二人の子供は黙って笑いながら頷いた。

それから程なく、母信子が急いだ様子で帰ってきた。

「ちよ、ちよつと全員集合！」

とても慌てた様子に、何事かと三人は庭から玄関の方に目をやった。

「これを見て！すぐ行くよっ！」

急かされるように、3人と信子は自転車に乗ってどこかへ消えた。

信子が持っていたのは一枚の紙ときゃべつが1玉。
そこにはこう書かれていた。

本日

きゃべつ1玉

20円

お一人様1玉限り

人間もすずめも似たようなものである。

初秋なり

「お母ちゃん、なんで僕は生まれてきたの？」

慎太郎は茶の間で縫い物をする信子に聞いた。

「それはね、お父ちゃんとお母ちゃんが出会って仲良くなったからだよ」

信子は糸の先つぽをパチンと切ると、優しくほほ笑みながら答える。

「じゃあ、なんでお父ちゃんとお母ちゃんは出会ったの？」

慎太郎は、針に新しい糸を通すのに集中する、母の背中に寄っかかりながら更に聞いた。

「うん？それはね、かの子や慎太郎と出会ったためだよ。そうやって幸せになれるように神様が仕合わせてくれたの」

「ふーん。なんか分からないけどお母ちゃん幸せなんだね。ところで、今日のおやつは神様がシュークリームを仕合わせてくれないかなあ」

そう言いながら、針で針山を意味もなくプスプス突き刺した。

「あらあ残念。今日の神様は慎ちゃんに豆餅を仕合わせてくれたみたいよ」

信子は言いながら、名札を張りつけた体操着を、出来栄えを確かめるように息子の胸の前に広げる。

「ちえっ」

昨日と同じおやつに口を尖んがらせた。

「いらないのならかの子に全部あげていいんだね？」

「食べます食べますっ」

「うふふふ」

「あははは」

笑いながら慎太郎が信子の膝に頭を乗せ、寝っ転がる。
残暑厳しい昼のこと、赤とんぼの群れは右へ行ったり左へ行ったり。
その秋の象徴達はひぐらしの奏でるメロディに乗りながら、ゆつくりと円を描き、新しい季節を我が街に連れてきてくれた。

旅立ちの日

あれから八年が過ぎた。

高校をでたかの子が看護学校に進むために遠くへと旅立つ日だ。

進路が決まった昨秋から、寒い時期を越え、梅が咲き出した頃からお別れが近づいてきている事は十分に分かっていた。

でもなんだか実感がわかないまま今日という日を迎えてしまった事を、寛二も信子もそして、新太郎も、茶太郎だって後悔の気持ちが少しあるのかもしれない。

一人だけ違うのは新しい生活に向かってまっすぐに目を輝かせているかの子だろう。

新しい桜色のセーターを着て旅立つ我が子を見て、寂しい反面、心から誇らしげに思う寛二と信子であった。

玄関にて、戸を開け旅立つかの子を見送ろうと家族みんなが集まった。

「お盆には帰ってくるんだろ？」

寛二がかの子の肩に落ちた桜の花びらを掃いながら問いかける。

「うーん、忙しいから、わかんないけど」

「帰ってくるわねえ？」

信子がかの子の頭を軽く撫でながら問いかける。

「だから、忙しいから」

「帰るよね？」

続いて新太郎がかの子のスカートの裾を引っ張る。

「いや、だから」

「ふにゃ」

信子に抱えられたすっかりおじいちゃんになった茶太郎が止めを刺す。

「帰ってまいります！」

「えがった、えがった」

皆が一同に顔を見合わせると朗らかに笑った。

「おい、これから行くのかい？」

前の家から黒間夫婦、隣から長島の老夫婦が顔を出した。

「これつまね - もんだけど持ってたよ」

「え、おじさん、ありがとう」

「つまねーもんだけど、女の子はお洒落しねーとな」

「のん兵衛の癖に分かってるじゃん」

「あたりきしやりきよ、こちとら江戸っ子でい」

「やーね、この人ったら」

「あははは」

新居について包みを開けたかの子が、中に入っている巨人のはっぴを見て落胆するのはこの日の夕方のことである。

「長島のおじいちゃんもおばあちゃんも元気だね」

「ごほっ、ごほっ、わしも年だしもう会えないかもしれないのう」

「何言ってんの、まだまだ長生きしてよね」

「お盆には帰ってくるんだらう」

「うーん、忙しいからねえ」

「え？」

「あ？」

「は？」

「あんだって？」

「うん？」

「なに？」

一同が声を揃える。

「帰ります。急いで帰ってきます」

「だよねー」

一同が再び声を揃える。

「ふふふ」

「あははは」

こうして紆余曲折を経て、かの子は新しい生活へと旅立っていった。電車に乗りひとつ空いていた席に腰掛けると、早速母信子を作った大層な重箱のお弁当の包みを開いた。ふと、横に挟んであった封筒が目に残る。封筒開くと、中には一通の便箋が入っていた。

背景

かの子様お元気ですか？

て言うかさつきまで一緒だったけどさ。

元気にこしたことは無いよね。

向こうに行ってもお父ちゃん、お母ちゃん、慎太郎、みんなで応援してるよ。

辛いことがあったり、悲しかったり、誰か心ない人に否定されたと
き、自分が一人だなんて決して思わないで。
孤独なんて思わないで。

みんないるよ。

みんな想ってるよ。

何も言えないけど、とにかく元気でいてな。

どこにいても元気で笑っていてな。

嫌だったら帰ってくるんだよ。

でも少しは我慢するんだよ。

でも少し我慢したら帰ってくるんだよ。

なんか分けが分かんないけど、お盆に帰ってくるんだよ。

それまで元気でね

敬具

父&母より

手紙と一緒に入っていたポスト型の貯金箱。

裏にはマジックで『かの子貯金』と書かれてあった。

慎太郎貯金もあるのだろうか、そんな事を考えながらばんのチャ
ックを閉めると窓の外を眺めた。

街の自慢である桜並木が今年も綺麗に咲き誇っている。

毎年当たり前のように見てきた風景も、今年は何だか違うふうに感
じた。

家族や近所、友達など自分を支えてくれる人達と重ね合わせ、自分を新しい道へと導いてくれているようであった。

「いつもありがとう。これからもよろしくね」

心の中でそう言つと、静かに目を閉じた。

小さな夢と大きなかばんを載せた列車は、輝かしい未来へ向かつてひたむきに走つていった。

・・・その日の夜、山倉家での一人減つた食卓は、なんだかメインディッシュがないディナーのように淋しい感じがした。

「お姉いなくなっちゃったね」

慎太郎がやや沈んだ空気を察するように口を開く。

「何言つてやがんだ、いなくなつてなんかいないよ」

寛治はそう言いながらコップのビールを飲み干した。

「このでっかい気持ちの真ん中にかの子はいるんだよ、なあ？」

寛治がコップを差し出すと信子はビールを注ぎながら微笑む。

「そうよ。このカレーを見てごらん。ごはんの父ちゃんと、カレー

の母ちゃん、にんじんのかの子がいてじゃがいもの慎太郎がいるの」

白いごはんにホカホカのルーをかけながら信子が言うと、寛治がうんうんと目を細めた。

「ごはん、ルー、人参にじゃが芋が混ざって家族だわな」

寛治の言葉に信子がニコっとうなずいた。

「ていうか、僕、おでんの時もじゃがいもだったよね」

「そう言えばそうね」

「だな、相変わらずじゃが芋頭だな」

「ふふふ」

「あはははっ」

長い旅路の始まりの、桜舞い散る春の夜に、吹かば吹けよと雲は言う。

いくつも数えて待ち焦がれ、あの娘が帰るその日まで。

止まった時計は動き出す。その日が来たら動き出す。

あの娘が帰るその日になれば。

毎年庭で刹那にひと時の栄華を誇る桜の花が、旅立つ娘を祝福するように夜空で微笑んでいた。

特別賞

必勝巨人さん

家族みな

笑って食べる

カレーの日

月夜が桜を照らしてる

大事な娘が旅立つこの日

元気でいてねと

エールを送る

書評

一級俳句士 高柳原水師範

うーん、もはや俳句ではないですが、何となくいい感じですね。

私も今夜はポチとカレーを食べます。

逃げた女房が残していったレシピを見て作ったカレーです。

伸美、見てたら帰っておいでね。

旅立ちの日（後書き）

旅立ちの季節なのでこんな終わり方にしてみました。
全部読んでいただいた方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1357c/>

ファミリー日記

2010年10月14日14時55分発行